



# ショートコメント

★★★★

Data 2023-145

## 春の画 SHUNGA

2023年/日本映画

配給：カルチュア・パブリッシャーズ/21分

2023 (令和5) 年12月9日鑑賞

シネ・リーブル梅田

監督：平田潤子  
 出演：横尾忠則/会田誠/木村了子/石上阿希/早川聞多/浦上満/C. Andrew Gerstle/Michael Fornitz/橋本麻里/朝吹真理子/春画ール/ウィヴィアン佐藤

### みどころ

エロ本、アダルトビデオと言えば、性欲丸出しのエロ親父を連想するが、春画と言えば芸術的で文化的！春画なら、愛好者を集めての展示会や品評会もOKだ。そんな狙いで(?)平田潤子監督が本作を監督したが、本作がR18+とされたのは一体なぜ？春画はエロ？それとも芸術・・・？

太平の世を謳歌した徳川300年は平和な時代。そして、春画をはじめとする庶民の文化が花開いた時代だ。本作を見ていると、そのことがよくわかる。葛飾北斎の「富嶽三十六景」や喜多川歌麿の美人画は知っていたが、こんなに多種多様な春画があったとは！こりゃ間違いなく、世界に誇るべき日本の芸術だ。そして、こりゃゴッホ以上、セザンヌ以上！本作を鑑賞する中で、そんな実感がハッキリと確信に！

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

◆映倫の区分はG、PG12、R15+、R18+の4種類がある。そして本作は、R18+とされている。それは一体なぜ？春画はエロ？それとも芸術・・・？

今ドキの日本の若者は「春画(しゅんが)」と聞いても何のことかわからないだろう。そして、「春の画」となると、もっとわからないはず。また、「SHUNGA」と英語(カタカナ)で書いても、わからないはずだ。しかし、もっと直接的にエロ本とかエッチ本と言えばわかるはず。また、アダルトビデオとか成人映画と言えばハッキリわかるはずだ。しかして、そんなネタが本当に映画になるの？そんなことにチャレンジした監督は一体誰？

◆それは、私が全然知らなかった平田潤子という監督。本作のパンフレットには、プロダクションノートとして、平田潤子監督の「春画の映画を撮ることは、日本人の姿を探す旅」があるので、これは必読だ。また、本作のチラシには「禁じられた美の世界。私たちは、まだその奥深さを知らない。」「江戸時代に隆盛を極め、明治時代に禁じられた絢爛たる文化。春画を知ると、現代人が知らなかった(日本の姿)が見えてくる——」、「エロティシ

ズムだけではない、多彩な表現内容、技巧、その創造性！表情豊かに描かれる「性」と「生」を発見する驚きのドキュメンタリー映画。」等の文字が躍っているので、これを見て本作に興味を持った人は、必見！興味を持たなかった人は、パスすればいいだけだ。

◆ちなみに、本作はR18+指定とされているが、作品情報によれば、本作は次の通り紹介されている。すなわち、

葛飾北斎、喜多川歌麿をはじめとする江戸の名だたる浮世絵師たちが、並々ならぬ情熱を注いだ春画。彫り、摺りの高度な技術も投入され、「美」、「技」において超一流の芸術と呼べる作品が数多く生み出されたが、時代が江戸から明治に変わると“わいせつ物”として警察による取り締まりの対象となり、日本文化から姿を消してしまった。性別を問わず楽しめるアートとして再評価の機運が高まったのは、つい最近のこと。2013年、ロンドン・大英博物館での世界初の大規模な春画展に大勢の人が詰めかけ、その半数以上が女性で、2015～16年の、東京と京都での日本初の「春画展」も動員29万人を記録し、その約半数が女性だった。

◆本作冒頭、鳥居清長の「袖の巻」全十二図がスクリーン上に示されるとともに、その「復刻プロジェクト」のために奔走する人々の姿を通じて、「他の春画にはない、横長が特徴。」等のコメント（石上阿希／浮世絵研究者）が語られる。それを聞いていると、いちいちごもつとも……。 「画面の中に絵があり、詞書きがあり、背景がある。男女をクローズアップし、はみ出るから臨場感が出る。数ある春画の中でも抜きん出ている」とのコメントもすごい。世の中にはヒマな人種（？）がいるものだ……。

そう思いながら本作を観ていると、次から次へと出てくる作品はすごいものばかり。また、それを語る人たちの眼差しや言葉も真剣そのものだから、少しずつ共感を覚えてくることに。こりゃ、すごい。こりゃドキュメンタリーでなければ表現できない、まさに春画だ。

◆『HOKUSAI』（20年）（『シネマ49』164頁）を観た私には、葛飾北斎が世界で最も有名な日本人アーティストだったことがよくわかる。また、江戸時代における「文化文政の時代」が、浮世絵や歌舞伎、遊郭などの町人文化が花開いた時代であり、その時代に葛飾北斎だけでなく、喜多川歌麿、東洲斎写楽等の個性的で優秀なアーティストが次々と誕生したことがよくわかる。

他方、同作を観ることによって、アーティストたちのプロデュースをするとともに、絵や本の版元として大いに稼いでいた男が、耕書堂の店主、蔦屋重三郎（阿部寛）であることもよく理解できた。ところが、同作のストーリーは、浮世絵がエロチックなら美人画も

エロチックで「世の秩序を乱すもの」として、お上（当局）から家宅捜索が入り、店に並んでいた作品を全て焼却処分されてしまうシークエンスから始まっていたから、アレレ…。文化文政時代は浮世絵や美人画等の町人文化が花開いた、いわば日本のルネサンスのような時代ではなかったの？本作では、徳川時代に春画は大人気で、町人たちは大らかな性を大いに楽しんでいたかのように語られているが、その実態は？浮世絵も美人画もダメなら、春画はもっとダメだったのでは…。？本作導入部の「袖の巻」のエロさを見ていると、私の興味は当然そんな方向に向かっていくことに。

◆1789年のフランス革命によって、はじめて“国民”や“市民”が誕生し、1804年のナポレオン法典の公布によって、所有権を中心とする近代民法の基礎が作られた。また、王権の支配ではなく、市民（国民）が自ら主権者となる、近代国家（＝民主主義国家）が生まれる中で、基本的人権を核とする憲法概念が確立し、表現の自由等が認められるようになった。すると、徳川時代にあれほど庶民の間に広まっていた春画も、表現の自由が基本的人権として保障された、近代国家たる明治新体制になると、より自由に…。？

いやいや、そうではない。それは逆だ。すなわち、憲法は、一方で表現の自由を保障するとともに、他方で公共の福祉（社会秩序の維持）の観点から猥褻物（の陳列）の禁止等を定めたから、明治時代に入ると春画は取り締まりの対象とされてしまうことに。すると、その結果は…。？

私は1974年に弁護士登録をしたから、2024年には弁護士50周年になるが、その50年間に、①タイプからパソコンへの転換、②コピーの発展、③携帯とスマホに見る通信方法の進歩、④紙からデジタルへの転換が進み、今や裁判手続きも変わってしまった。それと同じように、1枚1枚絵を描き、彫刻を彫り、印刷していた春画の世界も、次第に写真に取って代わられたうえ、その後はビデオに代わり、スマホ全盛時代に代わり、今やAI全盛時代に代わっている。そんな時代の変化の中で春画が廃れてしまったのは当然だが、それを残し、語り伝えることの意義は？本作を鑑賞することによって、それをしっかり考えたい。

2023（令和5）年12月12日記